

# 鈴木信太郎記念館だより

## 第5号

### — 自由学園明日館100周年記念 —

### 洋風建築めぐりえ散歩

自由学園明日館の100周年を記念し、同じく豊島区内の歴史的建造物である当館と豊島区立雑司が谷旧宣教師館の3館が連携して、7月24日(土)から8月22日(日)まで「洋風建築めぐりえ散歩」(第1期)を開催しました。

いずれも洋風建築で「窓」の美しさが印象的な3館。1928(昭和3)年建築の当館(豊島区指定有形文化財)の書斎棟では、わが国におけるステンドグラス制作のパイオニアのひとり、<sup>うのさわつお</sup>宇野澤辰雄(1867-1911)が手がけた5点のステンドグラスが琥珀色の光を放ち、往時を偲びます。自由学園明日館(国指定重要文化財、1921[大正10]年)には、近代建築の巨匠で宇野澤と同じ年に生まれたフランク・ロイド・ライト(1867-1959)が手がけた、幾何学的デザインのモダンな窓が残っています。また、雑司が谷旧宣教師館(東京都指定有形文化財、1907[明治40]年)の居間の暖炉を飾るヴィクトリアン・タイルや窓の装飾は、シンプルな中に静謐な美しさをたたえています。

3館を巡ってそれぞれの建築の魅力を堪能するとともに、建築をモチーフとした各館オリジナルのめぐりえを、参加者の皆さんにお楽しみいただきました。プロ仕様の50色のクレパス(協力:株式会社サクラクレパス)を使い、一人ひとりが独自の感性で完成させためぐりえは、どれひとつとして同じものではなく、まさに「わたしだけのアート」です。3館のめぐりえを制覇した方には、各館オリジナルのポストカードをプレゼントしました(3種のうち2枚)。

この「洋風建築めぐりえ散歩」は、ご好評につき、10月30日(土)から11月28日(日)まで、第2期を開催いたします。文化・芸術の秋に洋風建築を巡り、「わたしだけのアート」を創り出す喜びを味わってみませんか。

(永嶋 里佳)

[会 期] 第1期:2021年7月24日(土)~8月22日(日)

第2期:2021年10月30日(土)~11月28日(日)

[会 場] (1)自由学園明日館(豊島区西池袋2-31-3)

(2)豊島区立雑司が谷旧宣教師館(豊島区雑司が谷1-25-5)

(3)豊島区立鈴木信太郎記念館(豊島区東池袋5-52-3)

[参加費] 無料

\*自由学園明日館は入館料が必要(500円/中学生以下無料)

[主 催] 豊島区(鈴木信太郎記念館、雑司が谷旧宣教師館)、

自由学園明日館

\*開館時間・休館日は、各館によって異なります。

詳細は当区ホームページをご確認ください。



図1 当館座敷棟で行われためぐりえの様子



図2 めぐりえの元となった書斎棟のステンドグラス(鳩)

# プルースト生誕150周年特別公開

## — 『失われた時を求めて』 関連資料 —

20世紀を代表する作家のひとり、マルセル・プルースト(1871-1922)。その生誕150周年を記念し、当館では、作家の誕生日である7月10日(土)から9月12日(日)まで、代表作『失われた時を求めて』の関連資料を特別公開しました(図1)。



図1 会場風景

なかでも一番のみどころは、プルーストの自筆書き込み校正刷(1920年頃)です(p.3図)。『失われた時を求めて』第三篇『ゲルマントの方』を出版(ガリマール社、1920年)する際に用いられたもので、作家自身によって用紙の上下左右の余白から貼り付けされた紙片に至るまで修正と加筆がびっしりと書き込まれており、推敲を重ねるプルーストの姿が目には浮かぶようです。校正刷は作家から出版社に送られた原稿を元に印刷所で作成したもので、作家と印刷所

の間を行き来し、校正が終わると処分される場合が多いため、残っていることは稀です。本資料は鈴木信太郎の次男で、『失われた時を求めて』の個人全訳(全13巻、集英社、1996[平成8]~2001[同13]年)でも知られるフランス文学者の鈴木道彦氏が、留学中のパリで、高名な外科医かつ文学研究者であり、当時「マルセル・プルーストとコンブレー友の会」会長を務めていたアンリ・モンドール(1885-1962)から贈呈されたものです。その詳細につきましては、本展示のために氏からご寄稿いただいた次頁の「アンリー・モンドールの書斎」をお読みください。

また、本展示では『失われた時を求めて』を翻訳、わが国に紹介したフランス文学者たちゆかりの資料もご紹介しました。訳者の多くは東京大学フランス文学科で辰野隆<sup>ゆたか</sup>や鈴木信太郎に師事した人物で、共訳者の淀野隆三と佐藤正彰から献本されたわが国最初の翻訳書『スワン家の方』(武蔵野書院、1931[昭和6]年)のほか、伊吹武彦<sup>いぶき</sup>(1901-1982/前期)や井上究一郎<sup>きゅういちろう</sup>(1909-1999/後期)から信太郎に宛てられた書簡等を展示しました。伊吹は本邦初の全篇完訳(淀野隆三、井上究一郎、生島遼一、市原豊太、中村真一郎と共訳、全13巻、新潮社、1953[同28]~1955[同30]年)に携わり、井上は戦前に第一篇の一部を久米文夫と共訳(作品社、1933[同8]年/1934[同9]年)、戦後には前述した新潮社の共訳に参加した後、初めての個人全訳を成し遂げました(全10巻、筑摩書房、1973[同48]~1988[同63]年)。信太郎も自身の随筆で、彼らのプルーストへの傾倒ぶりを紹介しています。「自分もすでに四十六歳となり、[...]この辺で覚悟をきめ、一生の仕事にプルーストと心掛けてみたい…大変大げさな申しやうですが、心にかたくさう念じました。」と信太郎宛の書簡(1946[昭和21]年10月30日付)(図2)で熱く語った伊吹。対する井上は、戦争末期の1943(同18)年、危険を覚悟でハノイへ講義に赴く前に信太郎の元を訪れ、もしもの時はこれまで翻訳したプルースト作品を出版してほしい旨頼んで旅立ったといひます。そんな井上を見て、信太郎は「何だかプルーストの亡霊が憑いてゐるやうな感」がしたそうです。

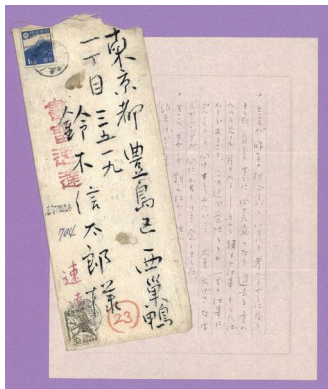


図2 伊吹武彦から鈴木信太郎宛書簡(1946年10月30日付)、当館蔵

(永嶋 里佳)

# アンリー・モンドールの書齋

鈴木 道彦

梅原龍三郎画伯のご子息である梅原成四氏なるしに伴われて、パリ17区にあるアンリー・モンドール(1885-1962)の住居を訪れたのは、1954年の10月10日だった。私が初めてパリに着いて十日目くらいのことである。

モンドールはフランス人としては比較的小柄で、頭の鉢の広い人だった。著名な外科医で、パリ大学医学部の外科病理学の主任教授だったが、同時にわれわれのようなフランス文学の研究者にとっては、浩瀚こうかんな『マラルメ伝』の著者であり、また当時は「マルセル・ブルーストとコンブレー友の会」の会長としても知られていた。梅原成四氏はその少し前に、私の父信太郎とともにモンドールに会っており、そのときに次の会合をセットしておいて下さったのである。こうして、マラルメを研究する父と、ブルーストを研究する息子が、相次いでこの大学者を訪問することになったのだ。

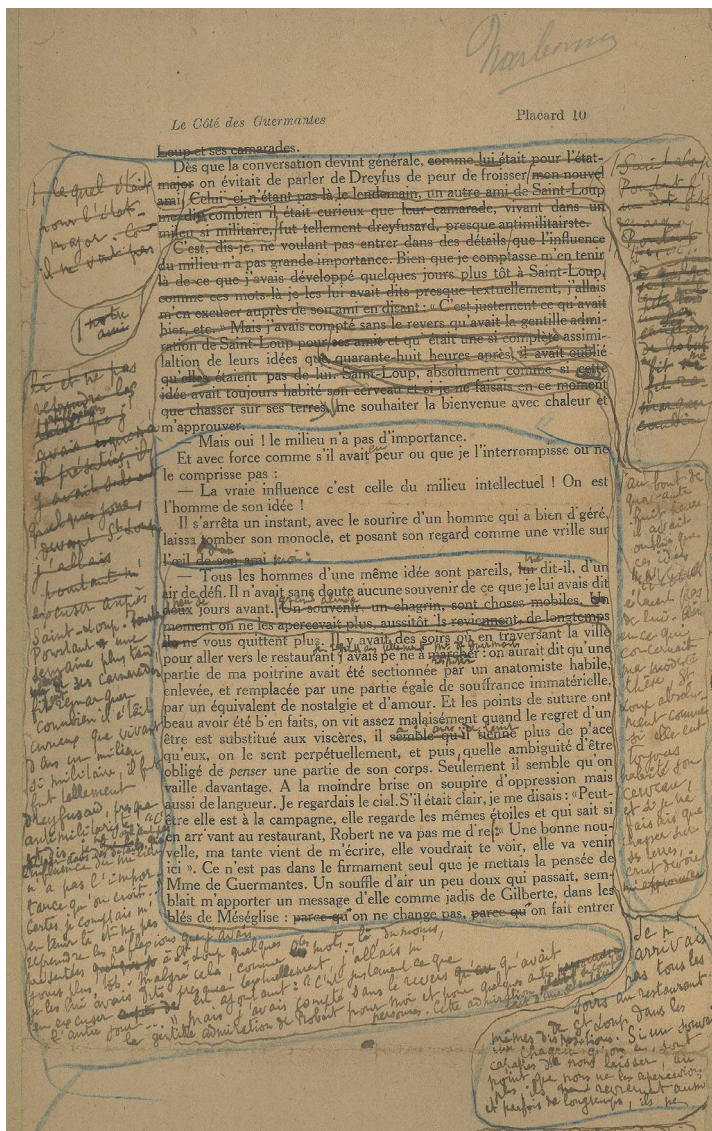
請じ入れられた書齋は、至るところに床から天井まで届く書棚しつらが設えられており、そこにびっしりと収められた書籍は、みな同じ色の革で装幀されて、それが書齋の色彩になっていた。モンドールはそのなかから二冊の本を取り出して見せてくれたが、それは十九世紀の詩人ジェラルド・ド・ネルヴァルが若いときに翻訳したゲーテの『ファウスト』の初版と、マラルメのリセ時代のノートを製本したものだ。私が感心して眺めていると、次に見せてくれたのはヴァレリーがブルーストに献呈した詩集『旧詩帖』である。そこには「マラルメの方へ プルーストに その崇拜者より」と献辞が記されていた。

「マラルメの方へ」というのはもちろん、ブルーストの『スワン家の方へ』にかけたヴァレリーの洒落である。ただしモンドールによると、プルーストはこれを読まなかったらしい。というのは、ページがアンカット\*のままであったからだ。しかし製本の際にそのページが切られてしまったので、プルーストが読まなかった証拠は残念ながら消滅した、ということだった。

一時間ほどあれこれと話しをして辞去しようとする時、「プルースト研究者のきみには、これを上げよう」と無造作に古びた封筒を渡してくれた。開けてみると、それは『ゲルマントの方』のある部分の校正刷に、プルースト自身がびっしりと書き込みをしたものだった。今回、鈴木信太郎記念館で展示されているのが、その現物にほかならない。こういうもので埋め尽くされたモンドールの書齋は、さぞかし愛書家や古書店主たちの垂涎すいぜん的だったことだろう。

\*フランス装の本は、読者が袋とじのページをペーパーナイフで切り開いて読み進める。

図 マルセル・ブルースト自筆書き込み校正刷『失われた時を求めて』第三篇『ゲルマントの方I』(部分) 1920年頃、当館蔵



## 鈴木家の住まい方 ―季節の催しと住まいの維持管理―

当館では、これまでに庭の竹を用いた七夕飾りを玄関ホールに設置するなど鈴木家の住まい方に倣った生活空間を体感できるような取り組みを行っています<sup>1</sup>。今回はこの住まいでの生活について、一例を紹介したいと思います。

座敷棟は埼玉県下吉妻しもきつま(現在の春日部市)の鈴木本家旧宅から1948(昭和23)年に解体移築された家屋で、建築年代は明治20年代と考えられています。現在、この書院造りを特徴とする八畳間の床の間に、鈴木家と所縁ある画家高森碎巖たかもりさいがん(1847-1917)の掛軸(複製)を季節ごとに掛け替えています<sup>2</sup>。軸の選定や住まい方を辿るにあたり参考としたのは、鈴木信太郎の長男・成文しげふみ(1927-2010)が日々の様子を記した『文文日記』です<sup>3</sup>。1961(昭和36)年に実家の座敷棟に夫婦で移り住んだ成文は、この家を大切に維持しながら暮らしました。1999(平成11)年から書き綴られ後に書籍化された『文文日記』には、日々の暮らしに溶け込む季節の催しや住まいの維持管理の様子も描かれています。

だがいざ書いてみると、さして多くのことはない。年間の行事としては、・二月餅搗うぎ、・四月バーベキュー、・七月七夕用の竹伐きり、・八月流しそうめん・十二月障子張替え、・季節毎の掛軸・額絵の掛替え、・暮と新年の正月飾りの取り付け・取り外しなど<sup>4</sup>。

研究仲間や教え子たちを招くことの多かった成文の暮らしの中には、こうした季節の催しが目白押しであった様子がうかがえます。さらに日常的には以下のことを行っていたとしています。

玄関前と石段と前面道路の毎朝の清掃、とくに五月の楠くすのきと十月の蔦つたの落葉は多い。夏には庭の雑草とり、朝夕の雨戸あの開け閉め、外出時の戸締まり・火の用心、建具や設備の故障には常に留意し修理すること等。いわば当たり前のことばかりだ<sup>5</sup>。

これらは記念館を運営する上でも示唆に富む内容です。四季折々の行事を生活に取り入れ、季節の到来や節目を感じながら日々を楽しむ姿や、日常的に建物の維持管理を行っていた様子を『文文日記』は伝えています。また、



座敷棟内観 (2021年8月筆者撮影)

成文と同じく建築家であった妻・貴美子は「人の一生と同様、建物も亦、そもその成り立ちから遭遇する住人との関係によって様々の運命を辿るものである」と住まい維持への想いを記しており、住み継ぐ暮らしをとものに大切にしていたことがうかがえます<sup>6</sup>。

本誌では、これからも建物や住人の変遷とその住まい方や使われ方、そして記念館の近況を紹介していきたいと思っています。

(森 泰子)

【注】1. 2020および2021年度の当館での七夕飾りは休止 / 2. 明治・大正期に活躍した日本の画家・高森碎巖さいがんによる軸4点。いずれも当館蔵 / 3. 『文文日記／日々是好日』全8巻は、神戸芸術工科大学学長時に刊行された『デザイン大学学長日記』全3巻の続編として刊行 / 4. 鈴木成文『文文日記Ⅷ』p.121 九月十三日 / 5. 同左 / 6. 鈴木叔「そして書院は残った」p.7

【参考文献】鈴木成文『文文日記Ⅷ』、NPO 法人文委会、2013年／鈴木叔(貴美子)「そして書院は残った」小冊子、私家版、1991年

### 鈴木信太郎記念館だより 第5号

発行日 2021年9月24日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>

SDGs未来都市としま



豊島区は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。